

日本の学校における運動会の発達に関する研究

木村吉次, 高橋春子, 勝亦紘一, 川端昭夫

A Study on the Development of School 'Undokai' in Japan

Kichiji KIMURA, Haruko TAKAHASHI,
Koji KATSUMATA and Akio KAWABATA

Abstract

Schools in Japan developed the 'Undokai' early in the Meiji Era and it has become a traditional school event in which all students should participate. It has gradually come to include some events from track and field, gymnastics, children's play and games, school dance, marching, pageantry and other recreational activities.

The purpose of this study was to investigate the historical development of the 'Undokai', especially in schools and to discover its characteristics which the authors consider have not been fully disclosed.

The results were as follows :

- 1) Teachers and organizers have often emphasized an equal opportunity to participate in 'Undokai' events ; therefore those in which only a few selected athletes enter are restricted to events such as relay races.
- 2) Track and field events were likely to be limited solely to some type of track event if students compete.
- 3) Gymnastics events were used for demonstrative elements in an 'Undokai' and reflected the gymnastics' system authorized by the Ministry of Education or popular ones of the period.
- 4) Dance events have become most suited for girls, emphasize femininity and draw attention from all spectators.
- 5) Although both central and local educational authorities sometimes warned teachers against the economic costs of holding an 'Undokai', the "luxurious" atmosphere of this event actually gave it a village-festival like character.

I 問題の設定

日本人の学校生活の思い出に深く刻み込まれてきたものに遠足, 学芸会, 運動会などの行事がある。しかし, 1993年9月から導入された学

校5日制は, 月1回の実施ではあっても授業時間の確保のために学校行事等の縮小という結果をもたらし, 春秋2回行われてきた運動会も秋は廃止されてしまったところも出てきている。これは児童・生徒の学校生活のリズムを変え,

学校の役割も変えていくものとみななければならない。たしかに、週2日制の実施が官庁・企業に拡がってきたこと、学校の外の社会教育施設や民間の教育・情報機関の発達にともなって生涯学習が課題とされるに至ったこと、これらに対応するかたちで学校の役割が見直されなければならない必然性は理解できるところである。

こうした意味では、これまで伝統的に行われてきた遠足、学芸会、運動会などの学校行事もその教育機能や意義が見直されてよい。しかし、その見直しが十分行われる前に現実にはそれが縮小、改変される事態が先に進んでいるのである。筆者らは、これら学校行事についても教育学的に十分検討される必要があるとする立場に立つものであり、とりわけ運動会については重大な関心をもって、現在の事態に注目して居り、この際学問的に検討されなければならないものと考えている。

ところで、運動会に関する研究となると、特定の学校の運動会の発足などについての研究を別にすると、総合的に考察したようなものは極めて少ないのが現状である¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾⁴⁴⁾。

これら限られた研究の中でも、岸野雄三氏は重要な指摘を行っている。第1には、学校で全日の授業を中止して、一切の時間を運動会に費し、父兄をはじめとして地域社会の関係者も加わって挙行される日本の学校の運動会は、日本独特のものであるとしていること、第2には西欧諸国の影響を受けながら、(1)競争的な要素、(2)娯楽的な要素、(3)デモンストレーション的な要素を骨子として、日本独自の形態に発展したものと捉らえていること、この二点である²⁾。また、山本信良氏らは「日本の学校運動会が村ぐるみ、町ぐるみの「マツリ」的な性格をもっていた点を特に重視していた⁸⁾。佐藤秀夫氏は、さらに運動会が所属する集団への帰属をたしかめ、参加者相互の同一集団構成員としての連帯感情を強化し、かつ参加者ひとりひとりのくつろぎや気晴らしを可能とするレクリエーション性を備えている点で、かつての〈ムラまつり〉の近現代版としての性格をもつこと、それゆえに日本人のコンフォーミズム志向性に適合し

て、学校のみならず広く社会的、地域的に普及、定着したものとみることができると認識している³⁾。木村も同様に運動会のもつ祝祭的性格を時間と空間、パフォーマンスとの関係で明らかにし、それが江戸時代の物見遊山の伝統と連続する面を指摘している⁶⁾。吉見は運動会を日本人の身体と祭りの記憶を再編成していこうとしたときに、その接合面にあらわれた、ひとつの媒介的な現象であったとみている。外国人である J. G. Haslett は、欧米諸国の影響を考慮しつつ、日本の運動会は「Undokai」というしかないものであって、それを欧米諸国の言葉に翻訳する適語がない、そうした独自性のものと理解している⁴⁾。

以上のような日本の運動会の特色の認識が行われてきているのに対して、本研究はそれらの研究で十分言及されてこなかった点を明らかにすることを課題とするものである。それはとくに運動会のプログラムを構成した演技種目・内容に注目し、それらの変遷を追跡し、その変化が運動会の意義と役割にどのような影響を及ぼしたかを明らかにすることを目的とするものである。

本研究が分析の対象とした運動会プログラムは、学校史、県教育史、教育雑誌、体育雑誌等に掲載されたものである。それらのプログラムが一部省略された形のものであったりして、必ずしも原本を忠実に再現していない場合もあるが、本研究ではとりあえず、概略的に傾向を把握し、より厳密な考察は今後各学校のプログラムを収集することを進めることによって行うこととし、将来の課題として残したい。

II 運動会の成立過程

日本の独特な運動会が成立するためには二つの源泉があったとみられる。その一つは欧米諸国、とくに英米の Athletic Sports (Athletic Meet) の影響を受けたものであり、いま一つのは、体育の普及を図るために企画された体育演習会の方式である。

(1) Athletic Sports の方式

岸野雄三氏は日本の運動会の起源を1868(慶応4)年に横須賀製鉄所においてフランス人技師や事業家らが紹介して行ったものに見出しているが²⁾, その内容についてはほとんど明らかにされていない。普通には1872年3月21日海軍兵学寮(海軍兵学校の前身)の「競闘遊戯」が初期のものとしてよく知られている。

この「競闘遊戯」(Athletic Sports)のプログラムは、木村が報告したように和文・英文両種のものがあり¹⁰⁾, 和文のものは種目名が皇漢学両方の珍しい名前がつけられていて有名だが、次のような内容のものであった¹¹⁾。

1. 150 ヤード競走(12歳以下の生徒による)
2. 300 ヤード競走(15歳以下の生徒による)
3. 600 ヤード競走(16歳以下の生徒による)
4. 300 ヤード障害物競走(海軍兵学寮所属の観覧者による)
5. 幅跳び
6. 高跳び
7. 砲丸投げ
8. おんぶ競走(15歳以上の生徒が10歳以上の生徒を背負う)
9. 二人三脚
10. 棒高跳び
11. 競歩
12. 50 ヤード目隠し競走
13. 三段跳び
14. 豚の尻尾つかみ競争
15. 立三段跳び
16. 200 ヤード卵拾い競争
17. 水運び競走
18. 豚の尻尾つかみ競争(前回つかめなかった場合)

この海軍兵学寮の「競闘遊戯」の種目は、①競技的種目(1, 2, 3, 5, 6, 7, 10, 11, 13, 15)と②娯楽的種目(4, 8, 9, 12, 14, 16, 17, 18)に二大別される。こうしてみると、最初の頃から娯楽的要素を持っていたことが分る。1879(明治12)年にはじまったとされる札幌農学校の「遊戯会」の種目にもこれが見られる¹²⁾。すなわち、1. 100 ヤード競争, 2. 200

ヤード競争, 3. 440 ヤード競争, 4. 880 ヤード競争, 5. 1 マイル競争, 6. 兵装 440 ヤード競争, 7. 走幅跳び, 8. 走高跳び, 9. 棒高跳び, 10. 背面競争, 11. ハンマー投げ, 12. 障害物競争, 13. 一足競争, 14. 三脚競争, 15. 韓信競争, 16. 竹馬競争, 17. 載囊競争, 18. 蛙飛競争, 19. 提燈競争, 20. 薯拾い競争, 21. 食菓競争, 22. 髻競争等が行われていて、大むね1. ~11. の種目は競技的種目であり、12. 以下の種目は娯楽的種目であったとみられる。

このように、Athletic Sports 方式の導入されたものがすでに娯楽的種目を構成要素としてとり入れていたのだが、これをごく少なくして競技的性格を強めていたのが、1883(明治16)年6月16日にはじまったとされる東京大学の陸上運動会である。その種目は次のようであった¹³⁾。

1. 100 ヤード競走, 2. クリケット球投げ,
3. 100 ヤード競走決勝, 4. 高跳び, 5. 220 ヤード競走, 6. 砲丸投げ, 7. 220 ヤード競走決勝, 8. 幅跳び, 9. 440 ヤード競走, 10. 来客競走, 11. ハードル走, 12. 棒高跳び,
13. ハードル走決勝, 14. ハンマー投げ, 15. 880 ヤード競走, 16. 教員競走, 17. 一足競走, 18. 慰み競走

このように、10, 16, 17, 18 を除けば陸上競技会そのものと云ってよいものであった。ともあれ、明治初期高等教育機関に導入された Athletic Sports 方式のものは、競技的要素と娯楽的要素をもったものであったことが確認できる。

(2) 体育演習会の方式

1884(明治17)年4月20日東京神田の体操伝習所において「春季大演習会」が施行された。会員および参観者併せて300有余名あり、盛会だったという。次のような順序で諸運動が行われたことが報告されている¹⁴⁾。午後1時開始。体操場でピアノ伴奏で次の演習をした。

第一 (軽運動) 徒手, 亜鈴, 棍棒等の諸運動。

次いで運動場に出て以下の運動を行った。

第二 フットボール(蹴鞠)。

第三 雙足競走, 雙立競走, 旗拾い競走, 綱引。

第四 ベースボール, クロッケー, 弓術。

第五 打毬

第六 野試合

第七 打毬

第八 同上

以上の運動の演習後に招待者および会員一同に茶菓の饗応があつて午後6時30分散会した。

この年11月23日体操伝習所構内において「東京体育会」の第3回秋季大演習会が開催され、会員200名程の参加があり、前二回に較べ一層盛会であつたことが報告されている。今回は体操場における軽運動(体操)についての言及がないけれども、「会員一統ハ構内の運動場に出て、各種の嬉戲運動を演習せり其次第ハ甚タ前回の趣向に異ならされとも……¹⁵⁾」といい、ベースボール、徒歩競走、徒歩打毬、弓術、囊脚競走、雙足競走などに賞品(手拭・紙)が授与され、フットボール、クロッケー、クォーツ等には賞品のなかったことが記されていた。

東京体育会の大演習会は、体育の普及を図るための一大デモンストレーションとして始められたとみられるが、その内容に軽体操と球技その他を含んでいた点に先の Athletic Sports の方式と異なつたところを見出すことができる。にもかかわらず、雙足競走、徒歩競走、囊脚競走など Athletic Sports 方式のものに登場していたのと同じ種目が入っていたことに注目しなければならない。もともと体操伝習所には「身体錬成ノ法ハ元來合式体操(軽運動)ノミヲ以テ足ルモノニ非ス併セテ戶外運動(遊戲法)ヲモ研究セザルベカラズ蓋シ戶外遊戲ノ利益タル啻ニ身体ノ強健ヲ増進スル而已ナラズ亦大ニ心神ヲ爽快ニシ優暢快活ノ氣風ヲ養成シ兒童体育上実ニ欠ク可ラザルノ一科トス¹⁷⁾」との認識があり、そのために『戶外遊戲法——名戶外運動法』を出版したのである。この書は、次のような種目を取りあげていた。

第一鹿ヤ鹿ヤ, 第二盲目鬼, 第三鬼遊, 第四卵帽子, 第五日月火水, 第六投球競走, 第七旗

拾ヒ競走, 第八旗戻シ競走, 第九二人三脚競走, 第十囊脚競走, 第十一ボーム(摺球), 第十二綱引, 第十三行進法, 第十四投環(クォイツ), 第十五投球(ボールス), 第十六トロコ, 第十七フットボール, 第十八循環球(クロッケー), 第十九ローンテニス, 第二十ベースボール, 第二十一操櫓術

この種目をみると、さきの大演習会の種目と共通するものが多くあることが判明する。体操伝習所は軽体操だけ普及しようとしたのではなくて、スポーツを含めた戶外遊戲の奨励も実際に行っていたことが明らかなのである。

東京体育会が1884年11月22日秋季大演習会を催したことも報告されているが¹⁶⁾、大演習会方式のものは各府県でも実施するような動きがみられる。その最初のものとしては、同年10月4日体操伝習所を会場として開催された東京府体育奨励会がある¹⁸⁾。府下各公立小学校の教員生徒七八百名参集したが、渡辺府知事、渡辺書記官が先頭に立って指揮し、辻文部大書記官、野村体操伝習所主幹も臨場したものである。

ここでは、体操術の熟達の程度によって3組に分け、熟達していないものに「競走旗拾」、熟達が徒手矯正術に止まるものに「徒手体操」、徒手を終え亜鈴球竿等に熟達したものに「亜鈴体操」をそれぞれ3回づつ行わせ、番外に「毬投フットボール等」の遊戲をし、徒手・亜鈴を演じた生徒に「矯正術」を行わせた。終つて優等の生徒に1等から3等まで賞品が授与された。こうしてみると、この体育奨励会は「上からの」体育奨励であり、学習到達度の比較試験的意味を担っていたことが分る。

同様に徳島県でも1884年4・5月頃から毎月1回又は2回体操大演習会を行うことを決め、徳島市街から1里乃至3里の範囲にある河原、浜辺、原野等を会場として師範学校および附属小学校、中学校、徳島市内各小学校、演習所近傍の小学校等の生徒を参加させ、体操と遊戲の演習を次の順序で行つた¹⁹⁾。

午前の分 徒手運動

器械運動 亜鈴 同上 棍棒 同上
球竿 同上 木環 同上

午後の分 遊戯の運動

旗戻し 同上 旗拾い 同上 縄跳
び 同上 フットボール 同上 競
走 同上 縄跳び 同上 綱引 同
上

この大演習会について「此会始めハ出會する者も其筋の奨励所謂仕方なしの者多きやうなりしか漸次其利益あるを知るに至り出會者も益増加し又其筋にては尚県下各郡へも勸奨せられたり²⁰⁾」(強調点筆者)と云われていることから官製の体育奨励運動だったことが明白である。東京体育会と類似のものに、1886(明治19)年3月に組織された埼玉県教育会があるが、いずれにせよ各府県で体育奨励会や体育大演習会が実施されるようになり、これが郡段階にまで組織されていく。この頃から連合運動会とか運動会の名称が使われるようになる。また、この時期は兵式体操の導入の時期と重なっていて、それがこれらの連合運動会や学校運動会でもとりあげられる。

(3) 連合運動会から校庭運動会へ

上述した体育奨励会や体育演習会方式のものは、近代教育としての体育の普及・奨励を図るためのデモンストレーション機能が強く押し出され、一部娯楽的要素は備えながら、競技的要素の少なかったところに特徴が見出せる。連合運動会の時代に入ってもこの特徴を受け継いでいたが、兵式体操の採用にともなって、隊組織を明確化するための旗の多用、集団的な対抗戦的な遊戯の強調、そして隊列を組んでの行進などが目立った。1886年11月3日茨城県水戸の連合運動会は、「諸学校の生徒ハ洋服或ハ窄袖袴等にて各其校に集る教師ハ其員数の整ふを待ち其指揮官となり校旗を建て隊を正して師範学校に繰り込む時に集る者総計一千六百余人余斯て午前七時三十分を期し喇叭を以て号令を下し各学校生徒特に師範学校生徒及中学校生徒ハ銃を担い……兵式の隊伍をなして桜山(会場一筆者)に進行す而して該所に達するや運動場には徽章として南側の左右に大旗二流を樹て……又幕を張り標を立て各其位地を示せり……²¹⁾」という

状態だった。神奈川県鎌倉郡小学校生徒運動会も各校から600名が鎌倉八幡社前に集合して「赤白の旗幟を以て全生徒を二隊に分ち旗奪の戯を演せり」といい、このほか「綱引競走等の戯を演せしめ」たとされている²²⁾。

連合運動会の対抗意識が強過ぎて問題を起こしたために1892(明治25)年で中止になり以後学校単独で行うようになった弘前の例もあるが²³⁾、一般的には明治30年代になってから学校単独で開かれるようになったとみられる²⁴⁾。金沢市とその周辺では、1898年頃にはじまっているが、日露戦争が戦われた1904年頃から単独開催が目立っている²⁵⁾。この学校単独の運動会は「校庭運動会」と呼ばれ、連合運動会と区別されている。地域によっては中断されたところもあるが、連合運動会は校庭運動会確立後も開かれていく。春秋2回開催したところも校庭運動会の実施が定着していくと、連合運動会は秋1回、校庭運動会を春1回開くようになった金沢市²⁶⁾、連合運動会1回のほか校庭運動会1回開き、その時期がしだいに秋に集中するようになった長野県²⁷⁾、大正後期から春秋2回各学校(校庭)運動会を開くようになった新潟市²⁸⁾の例などがみられる。

ともあれ、近代教育制度創設期における小学校の設備は未だ十分整っていないで、各小学校に運動場が整備されていなかった時期においては、各学校から離れた場所の河原、原野、浜辺、神社の境内、公園、中学校・師範学校校庭等に各学校の生徒が集まって連合運動会を開いたわけだが、すでに指摘²⁹⁾されているように1900(明治33)年の小学校令改正により、「体操科」は必須教科として確立し、同時にその実施を可能にするために「体操場」の設置を求めたことが、就学率の向上の結果一校当りの児童数も数百人規模に拡大したことと相俟って、各校単位での「校庭運動会」(その呼び方は地方により相違はあったが、学校単位で自校校庭で開く運動会をこのように総称しておく)の開催が実現し、普及していったのである。そして、この校庭運動会の成立期においてその後に学校運動会の定型とみなされるものが出来上がったよう

である。その例として長野県赤穂尋常高等小学校の明治 42 年度秋季大運動会のプログラムを掲げよう³⁰⁾。

赤穂尋常高等小学校秋季運動会次第書

一 午前八時出校

二 午前九時式場整列（北ノ原）

順序	運動種類	回数	運動者	運動主任
一	池の鯉		尋一	竹内
二	旗取競争	四	尋三女	小池
三	徒歩競争	五	尋二男	下手
四	源平旗争		尋三男	北村
五	スプーンレース		尋四女	竹松
六	徒歩競争	三	尋五女	野本
七	帽子取り		尋六男	竹村
八	魚釣り	六	尋四男	原
九	徒歩競争	五	尋五男	岩崎
十	竜の玉取り		尋六女	福沢
十一	虫の楽隊		尋三女	唐沢
十二	徒歩競争	四	尋二女	笹古
十三	姉妹競争		高二女	長沼
十四	バスケットボール		高一、二男	千村
十五	手玉競争		子守	福沢
十六	載囊スプーン		高一女	長沼
十七	兵式徒手体操		尋五、六男	宮下
十八	旭ダンス		尋五全	竹内
十九	俵競争		農補	松浦
廿	サラトガラソース		尋六女以上	上石
廿一	牛若丸		尋二男	上石
廿二	トンボ		尋二女	細田
廿三	美容術		尋三以上	宮下
廿四	載囊スプーン		来賓	倉田
廿五	バスケットボール		職員	鎌田
廿六	徒歩競争	十	尋一	竹内
廿七	ダンス野辺		尋四以上女	宮下
廿八	旗取競争	四	尋三男	北村
廿九	騎馬競争		尋四男	原
三十	徒歩競争	二	高一男	千村
三十一	球送り		尋三女	唐沢
三十二	砲台攻撃		尋二男	下平
三十三	旗取	四	尋四女	気賀沢
三十四	徒歩競争	二	高二男	小平
三十五	快勳教練		尋五男	竹内
三十六	徒歩競争	二	尋六女	福沢
三十七	小サキ兵士		分教場	中平
三十八	スエー典体操		尋三以上	宮下
三十九	百姓競争	二	農補	松浦
四十	蛇行競争		尋二女	細田
四十一	徒歩競争	三	尋六男	竹村
四十二	徒歩競争	一	農補	松浦
四十三	中隊教練		高一、二男	宮下
四十四	校旗マーチ		尋二以上	宮下

三 唱歌（君が代）

四 開会の辞

五 唱歌（運動会の歌）

六 児童所定の位置を占む

七 運動開始

八 式場整列

九 閉会ノ辞

十 万歳三唱

十一 随時解散

以上

ここでは、「運動」の前後に式典があり、君が代³²⁾、運動会歌の斉唱があり、万歳三唱³¹⁾が行われている。長野県小布施小学校の記録では 1898（明治 31）年の運動会で万国旗が掲げられたが、明治 40 年代の運動会風景には満艦飾や日章旗の交叉した校門³⁵⁾や杉葉などで飾ったアーチ等がみられる³³⁾。これに煙火の打上げ³⁴⁾、号砲、ラッパなどの音もまた運動会の雰囲気をかもしだす装置となった。

以上考察してきたところから、体育演習会方式は、Athletic Sports 方式の競技的・娯楽的要素の影響を受けながら、連合運動会の時代に遊戯的色彩を強め、体操の演習形式を薄め、さらに日清・日露両戦争の過程でのナショナリズムの高揚、学校教育の儀式化の進行の下で、連合運動会とは別に校庭運動会が確立して、その後の学校運動会の定型をつくりあげていったことが分る。Athletic Sports 方式はスポーツ競技の発達にしたがって、その実質を競技会の方にゆずらなければならなかった。

III 運動種目からみた学校運動会の特徴

本研究は学校運動会の歴史的変遷をとくに運動種目の変遷に焦点を合わせて考察し、学校運動会の特徴を明らかにすることが中心的な課題だった。運動種目も陸上競技（勝亦紘一担当）、体操（川端昭夫担当）、遊戯・ダンス（高橋春子担当）の三分野に注目して検討した。各分野別の具体的な考察の結果については次の機会に各担当者から報告する予定である。ここでは、それらの検討結果もふまえて総括的な考察の結果を報告する。

(1) 陸上競技関係種目について

前述したように Athletic Sports 方式は純粋に陸上競技種目を基本とし、これに娯楽的競走種目を加えていた。これに対して体育演習会方式では「体操科」の運動種目の演習という目的を明確にしていたことから純粋な陸上競技種目とみられるものは最初皆無であったが、すぐに徒歩競走がとりあげられ、連合運動会、校庭運動会へと引継がれ、競技的種目の不可欠のものとなっていた。しかし、跳躍や投てきなどのフィールド種目はほとんどとりあげられなかった。それらは後に別個の競技会として学校対抗で行われるようになる³⁶⁾。

学校運動会が体育演習会の系譜を引くため、全員参加（連合運動会は校外で行われたこともあり、ある学年以上参加とされた）の原則であったため、競争の激化を嫌った。1907（明治40）年愛知教育会の調査報告は、「演技」について「(1)略、(2)団体運動を多くすること、(3)非競走のものを多くすること、(4)撰手競争は成るべくなさざること（以下略）³⁷⁾」と注意していた。こうした考えはその後運動会の歴史を通じて維持されている³⁸⁾。陸上競技的種目では大正5年頃青年参加のマラソン³⁹⁾、大正12年のリレー・レース⁴⁰⁾の採用がみられるが、リレーは運動会の花形種目となった。

(2) 体操関係種目について

体育演習会がはじめ軽体操（徒手体操・手具体操を内容とした）の演習を大きな柱としていた。兵式体操が導入されると、これが連合運動会に隊列行進をはじめ柔軟体操、銃剣術、中隊教練等の採用になったが、校庭運動会の確立以降プログラムのごく一部を構成するのみで、ほとんど姿を消してしまう。これが再び姿を現わすのは第2次大戦期である。

体操種目は各時代に文部省が認めた新しい体操を採用する傾向が明瞭に表われて居り、スウェーデン式体操が主流になるとそれがとりあげられ、ラジオ体操が制定され普及するとこれに変わり、体操盛行の時代にはそれぞれ制定された合同体操が演じられた。それらはよく時代の

思潮を反映していて、大正デモクラシーの時代は比較的に競走遊戯が多い内容となっていたのに、全体主義が浸透した時代には合同体操が強調されたのである³⁵⁾。

また、体操が始めと終りのけじめをつけるためとか、昼食後の騒然たる会場を肅然とさせるためとかでプログラムに配されたことも事実で、伝統化した運動会において全体の流れの中のリズムを作り出す要素でもあった⁵⁰⁾。

(3) 遊戯・ダンス関係種目について

遊戯には競争遊戯・行進遊戯・唱歌遊戯と分類する仕方があるが、競争遊戯は1)走跳投の陸上競技的なもの、2)その応用、すなわち娯楽的要素を加味したもの、3)球技などゲーム的なスポーツ、4)旗奪い・帽子取りなどの初歩的ゲームに分類することができよう。1)は既に述べたように限られたものであり、2)が最初からあり、二人三脚、障害物競走など伝統的種目となり、4)の騎馬戦、棒倒し、綱引きなども多くの学校運動会に共通にみられる種目となったが、これも時代相を反映して、戦時色に彩られた。3)フットボール、ベースボールなどの球技スポーツは姿を消し、明治末から大正期に各競技会に移って行く。4)行進遊戯・唱歌遊戯ではカドリールに代表されるように外国から輸入されたり、翻訳された唱歌や日本で作られた唱歌に合わせて行う舞踊などが明治期後半になって多くなり⁵¹⁾、明治40年代以降女子に適したものとして運動会で欠かせない種目となった⁵²⁾。

IV 結 語

以上考察した結果、日本の学校運動会の特徴として1)全員参加の原則から競争性の緩和、選手制度の限定、2)競走の陸上種目が限定され、3)体操種目はその時代に学校体操として認められたものが採用され、4)ダンスは女らしさを強調し、運動会の花となったことなど、を明らかにした。

（付記）本研究は平成4年度中京大学特定研究助成（共同研究）による研究成果の一部である。

参 照 文 献

- 1) 野口岩三郎「近代的な運動会の起源」学校体育, 第4巻, 第8号(1951年9月号), 20-23頁。
- 2) 岸野雄三「日本の運動会の由来と特色」体育科教育, 1964年9月号, 2-5頁。
- 3) 佐藤秀夫(執筆)「運動会」(『最新スポーツ大事典』大修館書店, 1987年所収), 94-97頁。
- 4) Jacqueline G. Haslett: The uniqueness of “undokai” in Japan—bringing the community/family together through dance and sport-like activities, 中京大学体育研究所紀要, 第4号, 1990, 57-65頁。
- 5) 稲垣正浩「運動会の人類学—共同体の盛衰と運動会の変容—」体育科教育, 1993年5月号, 14-17頁。
- 6) 木村吉次「伝統スポーツとしての運動会」同上, 18-21頁。
- 7) 徳田茂男『金沢市小学校運動会史』(明治篇), 1970年。
- 8) 山本信良・今野敏彦『近代教育の天皇制イデオロギー』新泉社, 1973年, 299-399頁。
- 9) 山本信良・今野敏彦『大正・昭和教育の天皇制イデオロギー』新泉社, 1986年, 284-392頁。
- 10) 木村吉次「海軍兵学寮の競闘遊戯に関する一考察」日本体育学会第45回大会号, 1993年, 148頁。
- 11) 明治7年3月海軍省伺「兵学寮生徒競闘遊戯興行届」附図, 公文録(国立公文書館所蔵)。
- 12) 恵迪寮史編纂委員会『恵迪寮史』北海道大学恵迪寮, 1934年, 157-158頁。
- 13) 確実なものとして明治18年6月6日実施の種目を掲げる(『大日本教育会雑誌』第20号, 明治20年6月30日, 49-51頁)。
- 14) 『大日本教育会雑誌』第7号(明治17年5月21日), 37頁。
- 15) 同上, 第14号(明治17年12月31日), 47-48頁。
- 16) 同上, 第25号(明治18年11月30日), 80頁。
- 17) 坪井玄道・田中盛業編『戸外遊戯法—一名戸外運動法』1884年, 金港堂, 緒言2丁。
- 18) 『大日本教育会雑誌』第24号(明治18年10月31日), 74-77頁。
- 19) 同上, 第26号(明治18年12月31日), 57-64頁。
- 20) 同上, 第26号, 59頁。
- 21) 同上, 第44号(明治19年11月30日), 61-62頁。
- 22) 同上, 第49号(明治20年2月26日), 31-32頁。
- 23) 弘前市教育史編集委員会編『弘前市教育史』上巻, 弘前市教育委員会, 1975年, 370頁。
- 24) 埼玉県教育委員会編『埼玉県教育史』第4巻, 同委員会, 1965年, 380頁。四日市立中部西小学校創立百周年記念事業実行委員会編『百年史』同委員会, 1979年, 196頁。
- 25) 徳田茂男, 前掲書, 79頁および111頁。
- 26) 同上, 149頁。
- 27) 長野県教育史刊行会編『長野県教育史』第6巻教育課程編, 1976年, 912頁。
- 28) 新潟市義務教育史編集委員会『新潟市義務教育史 大正編』新潟市教育委員会, 1974年, 63頁。
- 29) 佐藤秀夫, 前掲書, 97頁参照。
- 30) 赤穂小学校百年史編纂委員会『赤穂小学校百年史』赤穂小学校百年史刊行会, 1972年, 381-382頁。
- 31) 石川県の運動会では1898(明治31)年4月が最初ではないかとされている(徳田茂男・前掲書, 74頁参照)。
- 32) 1900(明治33)年紀元節, 天長節, 一月一日の祝日の式において「君が代」合唱が定められたが, この年の上伊那連合運動会では君が代合唱が行われている(伊那小学校百年史編纂委員会編『伊那小学校百年史』同刊行委員, 1971年, 157頁参照)。
- 33) 赤穂小学校百年史編纂委員会, 前掲書, 385頁。

- 34) 同上, 387 頁。
- 35) 日章旗は会場内に数多く飾られたり, 生徒各自が手に持ったりしたこともあるが, 国旗掲揚が式典の一部に位置づけられたのは昭和 8 年のプログラムに見られる (金沢学校開校百周年記念事業推進委員会百年史編集部編『信州金沢学校百年史』同委員会, 1974 年, 204 頁および 333-334 頁)。
- 36) 長野県では, 1915 (大正 4) 年県下中等学校連合運動会の陸上競技種目採用と 1919 (大正 8) 年第 1 回北佐久郡小学校体育競技会の継走, 走幅跳び, 走高跳びの採用, 1924 (大正 13) 年の長野県師範学校主催第 1 回県下小学校陸上競技大会の開催が注目される (長野県教育史刊行会編, 前掲書, 940-941 頁)。
- 37) 愛知県教育会編『愛知県教育史』第 3 巻, 同委員会, 1973 年, 628-629 頁。
- 38) 浅川正一「運動会の新しい構想」学校体育, 第 2 巻, 第 9 号 (1949 年 9 月 1 日), 7 頁。
- 39) 長野県教育史刊行会編, 前出, 915 頁。
- 40) 伊那小学校百年史編纂委員会編, 前掲書, 264 頁。
- 41) 中島海「昔の運動会」学校体育, 第 3 巻第 10 号 (1950 年 9 月 1 日), 44 頁。
- 42) 徳田茂男, 前出, 67 頁。
- 43) 長野県教育史刊行会編, 前出, 910 頁。
- 44) 吉見俊哉「運動会の思想」思想, 第 845 号, 1994 年 11 月, 135-162 頁